

# 発 明 文 化 論

〈第 74 回〉

丸山 亮

## 襲 名 の 意 味

暮れの京都南座、顔見世興行で市川猿之助襲名披露の口上を観た。仁左衛門による経緯の紹介の間、猿翁から名を譲られた猿之助が頭を下げて客席に向き合っている。名を贈った猿翁は本来脇にいて新猿之助をよろしくというところだろうが、脳梗塞を患う猿翁はそれができず、登場していない。そこで中車が猿翁の言葉を代読する演出だった。ややあって後ろの幕が上がると、椅子に座った猿翁が舞台前面に押し出されてくる。そして中車が代読する言葉に合わせ、新しく襲名した猿之助を引き立ててほしいと客席に向かって万歳をするように、お願いのしぐさを繰り返した。これがかつては義経千本桜で宙乗りを見せてくれた猿之助と同じ人物とは思えない肉体の変わりように衝撃を受けたが、そうまでして襲名の儀式にこだわることの意味はなんだろうか。

仁左衛門や猿翁の言葉に表れるのは、興行主松竹と芸道の諸先輩への謝辞、大きい名跡を継ぐことの重み、観客への支援の依頼などで、どれもその意味にかかわってくる。

歌舞伎の芸は役者から役者へ受け継がれ、名跡がそれを象徴的に表している。「勸進帳」は市川家にとって家の芸といえる歌舞伎十八番の一つで、先に亡くなった十二代の市川團十郎は弁慶の役を得意としていた。ただ、それは先代の型をそのまま引き継ぐことではなく、文献に残った弁慶は七代目と九代目団十郎では違う弁慶だったと自らが語っている。

先日、NHK テレビのニュースで海老蔵へのインタビューを見た。亡くなった父の団十郎がいかに芸を厳しく仕込んでくれたかを語り、逃げ出したいほどの思いに耐えてきたので父親に接した気持ちがなかったと彼はいう。その口から、団十郎に触れるときしばしば敬語が出てくるのが気になった。父ではなく別格の役者団十郎に対して、思わず出てくる敬語なのだろう。

歌舞伎は世襲が基本だが、このままでは人材の供給が細ってくる。そこで国立劇場は以前から世襲によらない養成を事業としてきているし、松竹も近く公募による子供の「寺子屋」を開いて、俳優育成に乗り出す。

歌舞伎よりもっと歴史の古い能楽界にも襲名制度があり、芸の継承に一定の役割を果たしている。観世流能楽師、五十六世の梅若六郎は、芸は一代のもので、梅若家に伝わる企業秘密のようなものは全くないという。そして先代の父梅若六郎の、目には見えない、耳には聞こえない、香りのようなものを残そうと思うと語っている。(朝日、98.7.9)。

能と近親関係にある狂言では、かつて襲名をめぐる大きな騒動が持ち上がった。中絶した和泉流の宗家を誰が継ぐかで、三宅藤九郎家の長男と野村万蔵家の四男との争いになった。この場合、芸の継承以前の家の存続が、襲名の大きな動機になっている。

落語の世界はどうか。ここでは親族が襲名するとは限らず、先代が弟子のひとりを指名して決まることが多い。遺族が過度の発言権を持たないように、大きな名跡は落語芸術協会が預かり、その協議で決める場合もあるようだ。さらに真打の昇進には、席亭の推挙が必要ともいう。

絵師広重は遺書の中で、「広重」を継ぐのであれば大金を出して買い取るか、遺族の面倒を見ることを条件とすると書き残していた。その名跡を最初に継いだのは弟子の重信で、師には献身的に仕えたほか、養女に入り婿して、二代広重を継いでいる。

襲名とは、名声と経済的な価値が結びついた名跡の持つ無形の私有財産を受け継ぐことだが、この財産は社会の共有する、いわば公共財でもある。そこに襲名の難しさがあるといえよう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)